

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

「わかった！」という感覚が、 次なる深い学びへと生徒を誘う



広島県立廿日市高校
はつかいち
前校長

才木裕久

さいぎ・やすひさ ● 1954年広島県生まれ。広島大学政経学部卒業。77年県立瀬戸田高校、広島井口高校、広島国泰寺高校教諭を経て、2003年祇園北高校教頭。安西高校、宮島工業高校、廿日市高校で校長を務めた後、15年3月に定年退職。

文／堀水潤 撮影／梅村孝弘 (P.56)

2007年秋、授業改革の一環として協同的な学びを取り入れた広島県立安西高校のある教室で、4人の生徒が数学の問題に取り組んでいた。そのうちの一人の男子生徒は数学が苦手らしく、面倒くさそうな表情。しかし、隣の女子生徒がひと言、ふた言、彼に説明すると、「何や、そういうことか！そこがわからなかったけえ」と大きな声をだした。男子生徒はその後、目を輝かせて問題に向き合った。

当時、同校の校長であった才木裕久は、

その光景を今も鮮明に思いだす。
「熟考を経て自らたどり着いたにして、他者の助けを借りたにして、この『わかった！』という感覚こそ、深い学びへと誘う原動力になるのです」

アクティブラーニング（能動的学習）型の授業が今、注目を浴びているが、これを先駆的に導入するなどした才木の教員人生は、決して平坦なものではなかった。教育サービスの質の向上を追求して組織マネジメント構築に奔走し、授業を従来の斉講義式から学習者視点のものに転換しようとしてきた道のりを振り返る。

● 部活指導に軸足を置いていた20代が過ぎ、30代後半となった才木は、もどかしさを抱えながら教壇に立っていた。社会科（当時）の教員として、入試科目である日本史を教えているときは生徒の学習意欲が高いのに、そうではない科目を担当しているときは明らかに低い。この状況を何とか打開できないかとさま



さまざまに工夫はしても、容易には活路を見いだせなかった。

広島国泰寺高校に勤務していた1994年に広島県の教育センターへ長期派遣された際、研究テーマの一つを「生徒の学習意欲をどう高めるか」にしたのもそうした思いからだ。半年間の研究では、小グループの活動が学習意欲向上に効果的という示唆を得た。そこで、ゼミ形式や、当時はまだ事例の少なかったディベート、ジグソー法的な授業などにも挑戦した。

「ディベートを行うと確かに授業は活性化しました。けれど、毎回の授業で行うのは難しかった。結局、根本的な解決はできないままになっていました。というより、そのころの私の関心は、学校運営の仕組み作りや組織マネジメントに向いていたのです」

そう話すように、当時の才木の最大の関心事は、硬直化した学校組織の再構築にあった。職員会議の存在が強すぎ、校長の権限が制約されるなかで、機能的な学校運営ができていないことに「教諭ながら疑問を抱えていたのだ。」

「ネックの二つは主任制の形骸化でした。

当時、主任は「窓口」と呼ばれ、分掌の教員が互選し短期で持ちまわる慣習がありました。それが災いし、責任の明確化や迅速な業務改善ができないのです。例えば放課後に補習を行いたいと考え、教科の主任を集めて提案しても、「私は窓口だから即決できません。教科に持ち帰らせてください」となります。そして翌週再び会議を開くと、「反対意見が多く実施は難しい」で終わります。万事の調子。新しいことを試みようとしても前には進みません。校長が適任者を任命し、選ばれた主任が責任を持って業務改善にあたるという実効性のある組織にしなれば、と感じていました」

広島県では98年度入学者選抜から総合選抜制が廃止される。広島国泰寺高校は旧制広島中の流れをくむ伝統校であるものの、成績上位層は、中高貫の私学を目指し、あるいは校舎が新築された近隣の高校に流れ始めていた。危機意識を強めた才木は、3学年の担任をしていた98年、ある決断をする。前もって校長に相談したうえで、職員会議の補助機関化、「校務運営会議」の創設、主任の互選廃止などを柱とする校務運

営規定の見直し案を策定。夏期休業明けの職員会議の席で提案したのだ。突然のことに会議は紛糾した。

「強引だったかもしれませんが、きちんとした仕組みを作ることで教育が機能するのであればと、腹をくくりました。当時の校長と数少ない勇気ある教員の支援のおかげだったと思います」

会議は紛糾したまま年をまたぎ、多数決による否決というケースも考えられるなか、最終的に校長の決断によって可決。その結果、翌99年度から「校務運営会議」という名の主任会議が設置された。これによって意思決定が格段に速くなった。折しも広島県では2000年度に学力向上対策支援事業が始まるのだが、指定に足るだけの企画を県教委に提案する期限が迫るなか、学習合宿や校内模試などの新たな企画を短期間で打ち出すことが可能になった。補習の実施すらままならなかったことを考えると格段の進歩だった。

進路指導主事に加え、2000年度に新設された「学力向上対策委員会」の委員長にもなった才木は、さまざまな施策を実行。98年頃から続けてきた夜間・週末の塾回りの成果もあり、意欲の高い生徒が集まり始めた。

「仕組みを整え、流れを作り、それに応えてくれる生徒を集められれば結果は出るはずと思っていました」

事実、01年度に入学した生徒は、3年後、それまでの倍以上にあたる国公立大学の合格者をだした。異動先の高校

でその報告を受け取った才木は、いよいよ成果が出始めたと言んだ。

「仕組み作りから、教育サービスの質向上へ」

異動先の祇園北高校では、3年間教頭として勤務した。教職員の多忙感や業務の偏りなどの課題があるなか、業務の棚卸しや業務分担の見直しを進めたほか、団塊世代の大量退職に備えてナレッジ・マネジメントやOJTの推進体制の構築などに力を入れた。

こうした組織マネジメントに加え、才木にとって大契機となったのが、「学びの共同体」との出合いだ。佐藤学 東京大学大学院教授（当時）が提唱する学校改革の理念であり、コの字型の机配置やグループによる学習などで知られる。

近隣の中学校にあいさつに訪れた際、その実践に触れた才木は、「こんな方法があったのか」と、置き忘れていた難題に解決の光を見た気がした。

「私の関心事は仕組み作りと言いましたが、目的は何かといえば、教育サービスの質の向上です。生徒の学習意欲の向上も必須であり、それを可能にする方法の二つが、これに組織的に取り組むことだと強く思いました」

すぐに、自校で実践したかったが、教頭の業務は思いのほか忙しく、3年の月日は慌ただしく過ぎていった。思いが二気な形になるのは、06年、安西高校に校長として赴任してからだ。



「平成26年度第2回広島県立廿日市高等学校公開研究授業」にて。騒音対策として、アクティブラーニング型授業で使用する机とイスの脚にはすべて中古のテニスボールが手作業で取り付けられている。

協同的な学びで 学校全体が変化

校長初任の安西高校は、生徒指導上の課題が頻発する学校であったが、教職員一丸で取り組んだ指導の結果、落ち着きを取り戻しつつあった。とはいえ、依然中途退学者は多い。授業規律は改善されてきたが、意欲的に学んでいるといえる状況ではない。放課後になると目散りに下校する。そんな様子を見た才木は、学校の求心力と生徒の自己肯定感を高める必要があると感じた。

「先生方と生徒の間に非常に強い緊張が感じられ、生徒の表情が様に硬かったことを覚えています。以前の状態を考えれば仕方ないことだったのかもしれない。ただ、一定の改善が見られたら、立

ち止まらず、次の目標を設定し、道筋を明らかにしてその実現を目指さなければなりません。着任当初、同窓会員や地域の住民、近隣中学校長との話からも、そうした期待を強く感じとりました」

才木は、就任早々、教員全員と面談したうえで、「学校経営改革推進基本計画」を策定した。「安西高校進化論」と名付けたそれには、教科書や教育課程の見直し、制服の変更、学校行事の充実、部活動全員登録制など、約50項目からなるアクションプランが並んだ。教科書や教育課程を内容の濃いものへ見直したの

は、生徒のプライドを大切にしたいため。学校行事の充実や部活動全員登録制には、人間関係力を高めてほしいという願いも込められていた。

たのが、「学びの共同体」を参考にした「協同的な学び」による授業改革である。生徒同士が互いの表情を見られるよう教室の机をコの字型に配置したうえで、教員がだす課題に応じて、時に4人ほどのグループに分かれ、学び合う。わからないことがあれば仲間に質問し、聞かれたほうも説明することで理解を定着させていく。いわば、生徒全員による「参加型」の授業だ。

教員が体系的に知識を伝える従来の授業を否定するものではないが、スタイルはまるで違う。「イメージがわからない」と戸惑いを口にする教員がいたら、才木がこの授業を知るきっかけとなった中学校を教員全員で訪問し、公開授業に参加。また、「机の移動の際にでる音が大きい」という指摘ができれば、中古のテニスボールを大量に調達して、すべての机と椅子の脚にはめた。

そうやって手探りで始めたところに耳にしたのが、冒頭の「何や、そういうことか!」という男子生徒の言葉だ。

「わかったという感覚が、次の学びへと繋がります。数学者のフロイデントールは、『子どもが自分で発見できるような秘密を教師が話してしまうのは、悪い教え方というより罪悪である』と言ったそうですが、そのとおりだと思います」

当初、こうした授業スタイルに異を唱える声も強かった。何をしても無駄だといふあきらめムードに加え、厳しい生徒指導でようやく授業が落ち着いてきたのにタガが緩むのではという不安。また、

小・中学校と比べ、高校では全国的に実践例が希有だったこともあり、先進的な取り組みに対する理解不足もあったという。「それなら自分たちが先進事例になればいい」と、公開授業や研究会を積極的に開催した。

「佐藤学教授に何度も足を運んでいたこともあり、全国から二百人もの視察者が集まったこともあります。そうした場では当然、それぞれ教員が来校者の対応にあたるのですが、『やってみてどうですか?』と問われれば、『生徒が明るくなりました』とか『こういう効果がありました』などと自分の言葉で語ります。そうするなかで、自ずと、主体的にこの授業改革に取り組んでいるという意識が高まっていくのを感じました」

07年度から学年進行で取り入れたこの方式は、翌年度にはほぼ定着。こうして、同校は短期間で変貌した。

「授業が活性化し、何事にもあきらめない生徒が増えました。県の共通学力テストでは3教科の平均点が前年を大幅に上回りました。創設した硬式野球部などを軸に部活動や行事も活性化。地域の評判は変りました。また、中途退学者が減少して経営が安定し、09年度からは入学定員増も実現しました」

数多くのアクションプランの相乗効果ではあるが、学校全体で授業改革に取り組んだことが最大の要因だったと、才木は考えている。

■ 甘日市高校における アクティブラーニング型授業

次の宮島工業高校では2年間、実学の重要性を再確認しつつ、協同的な学びやキャリア教育の充実などに注力した。そして2011年、才木は、最後の勤め先となる甘日市高校に赴任する。1913年創立の伝統校であり、学力向上対策支援事業の指定以降、国公立大学の合格実績を伸ばしてきた進学校だ。「私たちのやり方を貫けば結果が出る」という自信と誇りがあふれているように感じた。

そのため、「時代に合わせて学びのあり方を変えよう」「リーダーシップやコミュニケーション能力を養成するためにも、協同性を視野に置いた能動的な学びのある授業作りが重要だ」と力説しても、理解を得ることは困難であった。「大学入試制度が変わったわけでもないのに、なぜ授業をそのように変える必要があるのか」「高校入学時の成績を考慮すれば、国公立大学に3桁合格させることだけでも大変なこと。ここまで積み上げてきたものを崩さないでほしい」というような声も聞こえてきた。

「過去の自分の経験からも、それは理解できましたし、押しつけでは永続性のある動きは作れません。従来のモノサシで見るとは限りはうまくいっている学校の二つでしたから、このままでもいいかと思った時期もありました」

しかし、「やはり、このままではいけない

」と才木が思い直したのは、「一部の授業で生徒が眠そうな姿を見せていたからだった。

「授業を観察して回った第一印象は、『他の学校と同様、斉講義の授業が多い』というものでした。真面目に授業を受けているとはいえ、先生の板書を単に書き写しているだけの生徒も少なくありません。たとえ定期考査を一夜漬けでしのげたとしても、本物の力にはなりません。授業を変えれば、もつと成績も伸びるはずだと感じました」

すでに生徒の能動的な学びを引き出す授業を展開できている教員もいたし、才木の提案に賛同し、素早く反応した教員もいた。これを広げていきたいと思った。

そこで才木は、地道な環境整備から着手した。生徒同士が学び合ったり、発表したりする機会を増やすため、各教室にミニホワイトボードを配ったほか、教室に巨大なスクリーンおよび電子黒板機能付きのプロジェクタなどのデジタル機器を設置。こうした機器の活用は、板書の手間を省き、教員が生徒と向き合う時間を増やすことにもつながった。授業改革担当の分掌を設けるなどの機構改革も行った。ここでも仕組み作りに力を注いだのだ。

1年目の夏には、後にアクティブラーニングの伝道師とも呼ばれる小林昭文氏（現 産業能率大学教授）を招いて研修会を実施した。同氏が飛び込みで行った3年生の物理の授業は、「いつも寝ている

生徒が一度も寝なかった」と話題となるほど活発なもので、新しい授業スタイルは徐々に校内に浸透していった。

生徒からは「ただ説明を聞くだけより充実感がある」「誰かと一緒に取り組むことで難問に挑戦する意欲が湧いた」という感想もあがった。

才木自身各地に足を運び、知識構成型ジグソー法の提唱者である東京大学の故三宅なほみ教授や、アクティブラーニング研究の第一人者として知られる京都大学の溝上慎一教授など多くの識者と出合い、知見を広めた。

授業を「型」にはめないよう、また、より広義の共通語が必要と感じ、「アクティブラーニング型授業」の名を用いるようになったのもこのころだ。ほどなくこの言葉は教育改革のキーワードとなり、同校が14年度に開催した2回の公開研究授業には県の内外から多くの見学者が訪れた。

その流れを加速させたのが、県教委が14年冬に打ち出した広島版「学びの変革アクションプラン」だと才木は言う。従来の「何を知っているか」から「知識を活用し、協働して何ができるか」への学力観・授業観の転換だ。才木はこれをアクティブラーニング型授業への強力な追い風ととらえる。

「これで、やっと変わると思い



ます。教員が教えたことを、いかに正確に再現できるかを学力測定の主軸にする時代ではありません。日本の子どもは受け身で、指示待ちで、創造力に乏しく、内向きで、自己肯定感が低いと言われる。授業を変えることは、これらの課題を克服するための一つの途になるでしょう。教員がわかりやすく教えることの大切さと同じ程度に、生徒が主体的に学ぶこと、協同的に学ぶことの大切さへの認識の広まりを期待しています。潮目が変わり始めたことを実感して今日を迎えられたのはよかったです。思い返すと、どれも一人ではできなかったことばかり。反論や批判もありましたが、それらも含め一緒に取り組んでくれた先生方には心から感謝しています（敬称略）